

上村泰裕「図書紹介 アルコック/クレイグ編『社会政策の国際的展開』」
(埋橋孝文ほか訳, 晃洋書房, 2003年。『市政研究』140号, 2003年に掲載)

はじめに 比較研究は何の役に立つか？

複雑で多様な世界のなかで、自分の立っている位置を確かめ、進むべき方向を見いだすにはどうしたらよいただろうか。自分の来し方をふりかえり、その反省のうえに立って将来の目標を決めるのも一つの方法だろう。けれども自分のことは、なかなか冷静に見つめられないものである。自分のことだけを考えるよりも、親しい友人や尊敬する先輩がどうやっているかを聞いてから考えたほうがうまくいくこともある。国や自治体の政策を立てる場合にも、同じことが言える。

ただし、気をつけないと、たった一人の先輩の意見だけを聞いて、自分も何がなんでも先輩と同じでなくては嫌になってしまうことがある。国の場合も同じで、プロシアから帰朝した青木周蔵が、実際には「象徴」に近かった若き明治天皇に向かって「陛下、カイゼルのようにおなり下さい」と言ったと伝えられるのは、そんな一例だろう。近ごろも一時期、アメリカ帰りの秀才エコノミストたちが、日本の現実を何がなんでもアメリカの教科書と一致するように改革しなければ気がすまない、という勢いだったことがある。

こうした「一辺倒」に対して、もう少し冷静に、何人かの友人の経験を聞いてから考えようというのが、ここで言う「比較研究」である。アメリカモデルだけでなくライン型資本主義もあると述べたアルベールの『資本主義対資本主義』(竹内書店新社)や、日独とアングロサクソン社会の違いを論じたドーアの『日本型資本主義と市場主義の衝突』(東洋経済新報社)をご存知の方も多いただろう。一方、社会政策の分野で有名なのが、エスピンアンデルセンの『福祉資本主義の三つの世界』(ミネルヴァ書房)である。

エスピン アンデルセンによれば、先進福祉国家は三つのタイプに分類できる。まず、自助努力を重んじ、政府は最低限の福祉を保障する「自由主義レジーム」(アメリカなど英語圏の諸国)。次に、職業別の福祉制度が発達している「保守主義レジーム」(ドイツなど主に大陸ヨーロッパ諸国)。最後に、高福祉高負担で平等主義を追求する「社民主義レジーム」(スウェーデンなど北欧諸国)である。各国にはそれぞれ固有の歴史があり、そう簡単にレジームを乗りかえることはできない。しかし、自国の位置を確かめ、冷静に改革の方針を立てるためにも、福祉レジームの比較研究は役に立つ。

本書の特徴 現代世界の多様な現実を伝える

さて、本書は、上記のエスピン アンデルセンの福祉レジーム論から刺激を受けながら、それに収まりきらない現代世界の多様な現実を伝えようとしたものである。編者アルコックの考えでは、すべての国が三つのレジームにすっきり収まるとは限らないし、各レジーム

ムの典型とされるスウェーデン、ドイツ、アメリカにしても、福祉レジーム論で語られている以上に複雑な歴史を経てきている。そこで本書は、わかりやすい分類を提示することよりも、むしろ国ごとに異なる経験を伝えることに主眼をおく。

アルコックの概説（第一章）によれば、福祉国家とは「国の公的機関が、市民のニーズに対して福祉を供給する公的な責任を担っている」国のことであるが、この概念は20世紀中葉のイギリスにおける福祉のあり方を念頭においたものだった。しかし現実の世界では、国家だけでなく家族やNPOなども福祉供給を担っている。さまざまな供給主体がいかなるバランスで福祉供給を担うかは国ごとに異なっており、その国の経済・政治・人口動向・イデオロギー・文化などの要因が、そうした「福祉ミックス」の特徴を決めるという。

続く第二章以下で本書が取り上げている対象は、エスピン・アンデルセンのいう「自由主義レジーム」からアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、「保守主義レジーム」からドイツ、日本、イタリア、「社民主義レジーム」の代表としてスウェーデン、さらに、エスピン・アンデルセンが扱わなかったロシア、南アフリカ、香港、の一二か国・地域である。これだけ幅広い国々の福祉についてその国出身の専門家が執筆した本は、他に類例がないだろう。

各章では、比較福祉論の共通語彙をふまえつつ、各国の近現代史と社会構造のなかでいかに福祉システムが形成されてきたかが、二〇ページ前後で簡潔に説明されている。例えばイタリアの章を見ると、ファシスト政権の「分割統治」によって発達した職域別の不公平な社会保護制度が、戦後四五年間続いたキリスト教民主党政権のもとでも基本的に温存されたこと、しかし保健医療部門では、共産党の閣外協力による「国民的連帯」政府が一九七八年に全国民共通の国民保健サービス（NHS）を導入したこと、一九九四年にキリスト教民主党中央の戦後政治が崩壊した後、労使合意に基づく官僚主導の格差是正改革が進められたことがわかる。

本書の問題点 イギリスからみた世界像

本書を読むにあたって注意すべき点もある。まず、対象国に偏りがあることである。一二か国・地域のうち、英語圏から七つも入っている。そのうちカナダ・オーストラリア・ニュージーランド・南アフリカは英連邦に属しており、香港は一九九七年までイギリスの植民地だった。その一方、OECD加盟国に限っても、（人口の多い順に）メキシコ・トルコ・フランス・韓国・スペイン・ポーランド・オランダなどの諸国が取り上げられていない。つまり、現代世界の多様性を伝えるといっても、それが「イギリスからみた世界像」であることは否めないのである。もっとも、英語圏に詳しいぶん、エスピン・アンデルセンの「自由主義レジーム」がじつは一枚岩でないことがわかるといった利点もある。しかし、例えば日本でこういう本を編集するとしたら、韓国・台湾・マレーシア・タイ・中国などを外すわけにはいかないだろう。なお、これらの国々の福祉については、宇佐見耕一

編『新興福祉国家論』(アジア経済研究所)や大沢真理編『アジア諸国の福祉戦略』(ミネルヴァ書房、近刊)が参考になる。

第二の問題点は、本書は厳密な意味での比較研究にはなっていないということである。例えば、イタリアでは、失業給付の不備を補うために障害年金が悪用された結果、一時は五三〇万人もの障害年金受給者がいたという。この面白い記述に触発されて、それなら他の国では障害年金受給者はどのくらいいるのか、という疑問がわいたとする。しかし残念ながら、本書の他の章はこの疑問に答えてくれない。読者は自分で資料を探すしかない。ちなみに、エスピン アンデルセンは「脱商品化指標」という基準を決め、その値の高低によって三つのレジームを分類したのだが、最初に基準や比較項目を決めておかなければそのような比較研究はできない。本書はエスピン アンデルセンが描きえなかった多様性を伝えることに成功しているが、著者たちも自覚しているように、それだけでは新しい代案を提出したことにはならないのである。

本書の読み方 疑問を喚起する教科書として

とはいえ、本書は多くの読者に推薦できる。まず、福祉に関心をもつ学生や実務家や研究者のためには、手軽な答えを見つけるための便利なハンドブックとしてではなく、多くの疑問を喚起する優れた教科書として。上記のイタリアの障害年金のような例は、学生にとっては期末レポートや卒業論文の面白いテーマになるし、実務家や研究者にもさまざまな着想や示唆を与えてくれるだろう。記述の「すきま」や「ずれ」は、比較研究の難しさを教えるとともに、その手がかりも示しているはずである。

次に一般読者のためには、福祉という生活に直結したテーマをめぐって、現代世界の多様な展開を伝えるノンフィクションとして。本書を拾い読みすれば、世界はスマートな経済モデルのように単純ではないし、一つの方向に収斂することもありそうにない、ということが実感できるだろう。また、各章は一九九〇年代の変化についてもふれているが、例えば九〇年代は、ドイツ再統一(九〇年)、ソ連崩壊(九一年)、アパルトヘイト廃止とイタリア戦後体制の終焉(九四年)、香港返還と「第三の道」の登場(九七年)といった大事件が続いた、冷戦後の激動の時代だった。これらの事件が人々の生活にもたらした変化の意味を、本書は歴史の流れのなかで理解させてくれる。